

前回の五言絶句に続き、今回は七言絶句について取り上げます。

李白の『早发白帝城』(早に白帝城を発す)の詩から七言絶句の平仄と押韻についてしてみました。この詩は、私が大学時代に暗唱した大好きな一首です。この詩の成立時期と創作動機については諸説があるようですが、ここでは省略します。

それはそうとして、兩岸の猿声というのが、今はもう絶滅した独特の哀しい声で啼く猿の声だったことを初めて知りました。猿の声といえばキャッキヤと表現されるように騒がしいイメージですが、中国の漢詩の世界で猿の声と言えば、ヒューッと尾を引くような哀しい啼き声のイメージなんだそうです。

そして、この詩は、早朝、白帝城を発った三峡下りの小船が長江の急流に乗って猛スピードで、千里彼方の江陵(荊州)目指して突き進む様を表現したもので、そこに作者のはやる気持ちが込められています。

漢詩には極めて珍しい、スピード感溢れる詩だというのも新たな認識でした。

早发白帝城 早に白帝城を発す
zǎo fā bái dì chéng 李白
lǐ bái

〔起句〕 朝辞白帝彩云间 朝に白帝を辞す彩雲の間
zhāo cí bái dì cǎi yún jiān

〔承句〕 千里江陵一日还 千里の江陵一日にして還る
qiān lǐ jiāng líng yī rì huán

〔転句〕 两岸猿声啼不住 兩岸の猿声啼いて住まざるに
liǎng àn yuán shēng tí bú zhù

〔結句〕 轻舟已过万重山 輕舟 已に過ぐ万重の山
qīng zhōu yǐ guò wàn chóng shān

▲平仄配置

七言絶句の平仄配置は、五言絶句に準じます。ただ一句の字数が二字増えるので、決まりもこれに応じて「二・六対」の一項目が加わるだけです。

○=平声 ●=仄声

1. 二・四不同、二・六対(二字目と四字目の平仄を逆にし、二字目と六字目は同じにする)

×○×●×○×

または

×●×○×●×

2. 反法(起句と承句とでは、二字目・四字目・六字目の平仄を逆にする。転句と承句でも同様にする)

起句 ×○×●×○× または ×●×○×●×

承句 ×●×○×●× または ×○×●×○×

結句 ×○×●×○× または ×●×○×●×

3. 粘法(承句と転句とでは、二字目・四字目・六字目の平仄を同じにする)

承句 ×●×○×●× または ×○×●×○×

転句 ×●×○×●× または ×○×●×○×

要するに、詩の前半と後半を境にして折り合わせると平仄の位置がピッタリ重なる。これが反法と粘法です。

×○×●×○×

×●×○×●×

×●×○×●×

×○×●×○×

または

×●×○×●×

×○×●×○×

×○×●×○×

×●×○×●×

4. 忌孤平(平声が仄声に挟まれる形●○●を嫌う。但しこの決まりは許容されることもあるが、七言絶句では四字目の平声が仄声に挟まれると●●○●●となる。これは禁じ手となっている。

5. 避下三連(下の三字に同じ平声または仄声が連なるのを避ける。五言絶句に同じ)

▲押韻の法則

七言絶句の押韻の決まりは次のようになっています。

1. 七言絶句の場合は通常、起句、承句、結句の三か所で押韻する。(正格)
2. 承句、結句の二か所だけで押韻することもある。(変格)
3. 転句の末尾では押韻しない。押韻しない句の末尾では、韻を踏んだ字とは平仄を逆にする。平声で押韻した場合、転句の末尾、および押韻しなかった起句の末尾は、必ず仄声にする。仄声で押韻した場合は、その逆。

原詩では、起句、承句、結句の末尾、三か所で押韻しています。「問」、「还」、「山」、何れも平声刪韻に属しています。したがって転句の末尾「住」は仄声です。

ちなみに、原詩の平仄は次ようになっていきます。

○○●●●○○
 ○●○○●●○
 ●●○○○●●
 ○○●●●○○

以上、原詩がこれらすべての法則に合っているかどうか、確かめてみてください(平仄の見分け方は前号参照)。

▲起承転結の法則

起承転結は絶句を作るためのルールです。サザエさんの四コマ漫画を想像して下さい。

1. 起句(ナニナニ…?)
2. 承句(フンフン、ソレデ…)
3. 転句(エエッ! ナニ? コレ)
4. 結句(ナルホド、了解)

この詩の真意を説くカギは、やはり転句にあります。この転句では、三峡下りの軽快感におよそ相応しくない悲しげな猿の鳴き声が登場して、オヤッ!と思わせますが、その悲しい響きを吹き飛ばすかのような一句が最後に来て、更にスピード感が増します。典型的な起承転結です。

ところで、そもそも唐代になぜこんな作詩法が確立したのでしょうか。その背景に仏教の伝来があるそうです。

六朝時代の中国の僧たちは、サンスクリット文字で書かれた仏典に触れて、世界に表音文字の存在があることを初めて知り、それが、一つの音節が子音と母音に分かれることの発見に繋がったようです。更に^{しょうみょう}声明

の楽(読経の一種)が入って来て、韻に対する研究が深まり、近体詩誕生に繋がったと言われているようです。古代インドの言語学のことを声明と呼ぶこともあるそうです。

唐の時代、空海こと弘法大師は唐の都、長安にまで足を延ばし、そこで唐王朝の標準音(漢音)に触れることとなりました。仏教の経典は全て呉音という南方の音で読みますが、空海は漢音で読む声明の楽を持ち帰りました。中国本土では失われた声明の読経法が高野山には残っているとのことです。真言宗でも普通の経典は呉音で読経するのに、声明の楽だけは漢音で独特の抑揚を付けて読むのだそうです。

ところで漢詩を訓読でも現代中国音でもなく、平安時代から現代に伝わる漢音で読み上げてみると、唐代の音が何となく伝わるような気がすると言われますが、どうでしょうか。

今日は難しくて頭がパンクしそうになりながら講義を受けていましたが、最後にメンバーの方がこんな質問を先生にされました。

「一字目はなぜ問題にしないのですか?」それに対して植田先生曰く、「『一三五不問』という言葉があります。一字目、三字目、五字目は不問なんです。自由にできる所は自由にしてください。逆に246はアブナイから気を付けろ!です。」国道246にかけた、植田先生のナイスなジョークのお陰で、この規則はスナリ私の頭に入りました。

知識の宝庫、魅力溢れる先生の存在は言うまでもなく、その引き出しを上手く開けて、思いがけないユーモラスなお話を引き出すことができるとは……。学びに仲間の存在は欠かせませんね。(実際ここまでは3月の講義で行われました)

さて、今度は杜甫の『春望』を取りあげ、五言律詩を見ていきましょう。この詩は杜甫の数ある作品の中で最も優れた詩とされ、日本人にも大変人気がありますね。五言律詩の平仄配置は五言絶句と同じで、二・四不同と反法、粘法。

押韻の法則は、一つには、各聯の末尾(偶数句の末尾)で押韻する、二つには、押韻しない句の末尾では、韻字とは、平仄を逆にする。というものです。この詩は偶数句が平声侵韻で押韻しています。したがって奇

数句はすべて仄声になっています。

春望 しゅんぼう
chūn wàng

杜甫 dù fǔ

〔首聯〕

● ● ○ ○ ●
国破山河在
guó pò shān hé zài
○ ○ ● ● ○
城春草木深 韻
chéng chūn cǎo mù shēn

くにやぶ く さん が あ
国破れて山河在り

しろ そ も く
城春にして草木深し

〔頷聯〕

● ○ ○ ● ●
感时花溅泪
gǎn shí huā jiàn lèi
● ● ● ○ ○
恨别鸟惊心 韻
hèn bié niǎo jīng xīn

時に感じては花にも涙を
そそ そ
溅ざ

別れを恨んでは鳥にも心を
おどろ お
驚かす

〔頸聯〕

○ ● ○ ○ ●
烽火连三月
fēng huǒ lián sān yuè
○ ○ ● ● ○
家书抵万金 韻
jiā shū dī wàn jīn

ほうか さん げつ つら
烽火 三月に連なり

かしょ ばん きん あ
家書 万金に抵たる

〔尾聯〕

● ○ ○ ● ●
白头搔更短
bái tóu sāo gèng duǎn
○ ● ● ○ ○
浑欲不胜簪 韻
hún yù bù shèng zān

か か
白头搔けば更に短く

すべ しん た ほつ
渾て簪に勝えざらんと欲す

成程、前半では、2字目と4字目に注目し、首聯と頷聯の間で二つ折りにすると、平仄の白黒がピッタリ合いますね！次に後半では、頷聯と尾聯の間で二つ折

りにしても、ピッタリ合います。更にこの詩の前半と後半、即ち4句目と5句目の間で二つ折りにしても、見事に白黒が一致するのです。これが粘法・反法です。誰が考えたか分かりませんが、古代中国文人の芸術へのこだわりを感じます。

さて、今回もこの詩の歴史背景について詳しくお話がありました。この詩は杜甫が安祿山の乱の最中、都長安城内に軟禁され、かつて栄華を極めた都の廃墟に立ち、絶望と憂国の情を詠んだものです。今回、このことが改めて一字一字から伝わってきました。意味は割愛しますが、最後の一句「渾て簪に勝えざらんと欲す」に関して……。簪は今でいう「かんざし」ではなく、冠を止めるピンのことでした。冠は官位の象徴です。当時、杜甫は曲がりなりにも官位を与えられており、いずれは国家人民の為に役立ちたいという夢を抱いていました。そういうことから、冠が留められないほど髪の毛がすり減った、というのは「その夢が果たせない」という意味でもありました。

当時はまだ40代の杜甫でしたが、すでに髪が薄くなっていたようです。「李白は苦勞すると白髪が三千丈になるけど、杜甫は冠が留められないほど短くなるんだね、ここでも両詩人の対照的な性格が表れているね」という植田先生の楽しいコメントで今月の報告を終わりたいと思います。